NO.22

働きすぎ黒書　ニュース

全日本教職員組合（全教）生権局

2007 年 3 月 20 日　東京都千代田区二番町 12-1　３Ｆ

洗脳・踏み絵・・・で

東京・小学校警備員

私は東京都の小学校の警備員です。この職に従事して３０年余りになりますが、近頃の教員の忙しさは、異常としか言いようがありません。少し前までは、放課後には子どもたちと遊んだり話したりする多くの教員がいました。また、水曜日に行なわれる職員会議の後は、バトミントンや卓球・テニスなどのスポーツを楽しむ時間はあったし、互助会主催の学校対抗の試合もありました。また、用務員や調理員・警備員を含めた親睦旅行も、年１回以上はありました。

しかし、いつの頃からかこれらの多くは、見られなくなってきました。夜の７時や８時になっても半数の教員が残っていることはザラであり、毎日９時を過ぎる教員も１人や２人は必ずいます。日曜や祭日に出動してくる教員も何人かいますし、多くの教員は、大きな手提げに自宅での仕事をどっさりと持ち帰るのです。

教員自身にも家庭があり、さまざまな人間関係もあることを考えると、彼らのパートナーや子どもたちはどうしているのか。近所付き合いや親戚付き合い、自分白身の趣味や生き甲斐、友人付き合いはどうなっているのか。そして、心身の健康が維持できるのか、とても心配になります。

何故こうまで忙しくなったのか。思いつくのは専科教員の減少です。家庭科や理科の専科はどこにも見当たりません。事務職員の減少もあります。教育委員会からの統計調査なども全て管理職が受け持つわけでなく、個々の教員が役割を振られています。また、児童数の減少で教員定数が減少させられた結果、様々な学校行事・事務（運動会や学芸会などの年間行事から日直や清掃などの日常業務など）が幾重にもおっ被せられていることも、大きな原因と思われます。

加えて、時間だけではなく、心理的にも教員を多忙にしているものに、全ての教員を一定の枠にはめ込もうとしているかに見える、研修と言う名の「洗脳」や教員管理の最終兵器としての自己申告という名の「踏み絵」、それに教員の集団的まとまりを破壊する、査定昇給制度も見逃すことは出来ません。

今日の子どもたちは、格差社会と呼ばれるに相応しい複雑で様々な家庭で育ってきていることから、学科を教えることすら個別的対応が求められています。極端に言えば、「昨年のスキルでは今年は役立たない」とも言えるのです。

　このような子どもたちに、個々の状況に応じた教育を保障するには、何よりも教員一人一人に、時間と心のゆとりを保障することが必要なのではないでしょうか。多忙な結果、まともな家庭生活、常識的な社会生活を送れない教員には、よい教育者を望むべきもありません。また、個々の子どもをじっくり観察し、その子に応じた教育を実践するには、一律的研修ではなく個々の教員がどのように対応すべきかを研究する十分な時間を保障すべきではないでしょうか。

　良い教育は、休養十分な教員によってもたらされるのではないでしょうか。